

# 秋の蝶

松岡隆子

走り根の錯綜 八月十五日  
八月の百日紅として紅く  
終戦の日やねんごろに顔洗ひ  
秋蟬のどの木ともなく鳴きたてる  
見覚えの径逸れてより秋暑し  
樹下深くゐて八月を送りけり  
誰か行きまた誰かゆく秋の坂

眸先生三回忌

鎌倉の眸日和を秋の蝶

師の音がする秋蝶のとぶ辺り

さやけくて何時までもゐて師の墓前

露草に見開きし眼を遙かにす

よい風が吹く紅萩の咲きだして

厳しい残暑も和らいできて漸く庭の露草が咲き出した。朝、門の露草に見送られ鎌倉へ向かった。墓参には小川美知子さんと横浜の新松子の皆さんが同行してくださった。先生のお墓は手入れが行き届いていてきれいだった。みんなで少しの塵を拭い少しの草を抜いた。供華に買い足したジンジャーの花がよく匂った。創刊三周年記念号を供えて手を合わせた。ひらりと飛んできた秋蝶がすぐに消えた。墓域はどこに佇っても先生の声が聞こえてくるような気がした。追善の句を詠み合い思い出を語り合った。よい一日だった。